

酒田より象潟へ

池田 隆

酒田の街へは一度行ってみたいと思っていた。理由は分からないが、書物やテレビでよく見かけたせいかも知れない。「奥の細道」を辿る旅の途上、立ち寄る機会を得る。まずは山居倉庫へ。そこでボランティアガイドさんから声を掛けられ、一時間ほどの市街案内をお願いする。

運河とケヤキ並木の間には十二棟の切妻白壁の大きな土蔵造りが軒を連ね壮観である。百年以上も時を遡った気分にはさせられるが、今なお農業倉庫として生き生きと躍動している。連続テレビ小説「おしん」でよく見ていたせいか親しみを覚える。

続けて旧燈屋や本間家旧本邸の前を通り、小高い日和山公園へ向う。最上川河口の港町、「なりに伸びる砂丘と松林の海岸線、小さな飛鳥を浮かべた日本海の広い海原、見飽きない眺望である。

あの小島が北前船にとり強風時には重要な退避用の風よけだったと、テレビ番組「ブラタモリ」で言っていた。園内には芭蕉や茂吉、露伴など酒田の景色を愛でた多くの文人墨客の石碑が立つ。その日は湯ノ田温泉で入り日を眺めながら海の幸に舌鼓を打つ。

翌朝、雨上がりの青空の下、三崎山旧街道から奇岩怪石の海岸絶壁を見下ろし、有耶無耶の関を経て象潟へ。かつては鳥海山の噴火で出来た九十九島八十八潟の景勝地で、能因や西行が訪れ、歌枕として松島と並び芭蕉が恋い憧れた地である。

象潟や雨に西施がねぶの花

芭蕉

西施の像が立つ。「聾に做う」の語源となった西施だが、スマートな顔つきで額に皺を寄せてはいない。彼女も句に詠まれ嬉しいのだろう。

芭蕉が訪れて百年余り後のこと、一八〇四年の大地震でこの辺りは一夜にしてニメートルも隆起し、浅瀬の海は陸となり風景が一変したという。劉廷芝の漢詩「代悲白頭翁」の一節「桑田変じて海となるを」を思い起こす。変化は逆向きだが。

象潟の中心である蛸満寺へ向う。見渡すと稲田が広がり、松の茂る小山が点在し、鳥海山が悠然と構えている。ただ絶世の美女は十人並みの美貌になっていた。